



震災シンポジウム

～いきるつながる みちひろく～

1.17と3.11を「つなぐ」

兵庫県教職員組合副委員長 泉雄一郎

兵庫組は、阪神・淡路大震災の10周年に当たる2005年まで、毎年「震災と教育を考えるシンポジウム」を開催してきた。また、2010年には、アメリカの教育関係者と日常的な心のケアを考えるシンポジウムを開催した。こうしたシンポジウムを通じて学んだ、学校と地域が連携した防災体制のあり方や被災した子どもたちの心のケアのあり方を、日々の教育実践に生かすとりくみもすすめてきた。

私たちがこの間、兵庫の地でとりくんできた防災教育のキーワードは、「いのちやさしさ まなび」。命の尊さや助け合いの大切さ、ボランティア精神の重要性、心のケアなど、震災から得た教訓を教育改革に生かそうとするものだ。今回の震災シンポジウムのテーマは、「いきるつながる みちひろく」。このテーマは、兵庫県教職員組合、兵庫教育文化研究所の教育研究活動のテーマでもある。この震災シンポジウム開催の趣旨は、東日本大震災被災直後の学校の対応や今日に至るまでの被災地各県教組のとりくみ、さらには1周年を間近に控える被災地域の学校や子どもたちをめぐる教育課題や運動課題について学び、それらの課題を共有し、兵庫だからこその息の長い支援活動について考え合う機会とすることだ。

第61次教育研究全国集会 in TOYAMA



高等教育・選抜制度と進路保障分科会

障害児教育分科会



主催者あいさつ

の尊さや助け合いの大切さ、ボランティア精神の重要性、心のケアなど、震災から得た教訓を教育改革に生かそうとするものだ。今回の震災シンポジウムのテーマは、「いきるつながる みちひろく」。このテーマは、兵庫県教職員組合、兵庫教育文化研究所の教育研究活動のテーマでもある。この震災シンポジウム開催の趣旨は、東日本大震災被災直後の学校の対応や今日に至るまでの被災地各県教組のとりくみ、さらには1周年を間近に控える被災地域の学校や子どもたちをめぐる教育課題や運動課題について学び、それらの課題を共有し、兵庫だからこその息の長い支援活動について考え合う機会とすることだ。

全体会の冒頭、主催者あいさつで中村譲日教組中央執行委員長は「教育研究活動の生命は、子どもを見つめ、地域・保護者と十分に連携した実践、教育活動や職業生活を客観的に考えることにある。職場を『協力・協働の場』として位置づける。29日の特別分科会では、

分科会では、25の分科会と「子どもたちが発信し震災からみえる子どもの権利」と題した特別分科会が、全国からの教育実践の報告があり、参加者による討論がおこなわれた。多くの分科会で、震災に関するリポートが報告され、今後の防災・減災教育の方向性などが討論された。

「全国各地のリポートを聴く中で、『兵庫の教職員は組合に守られている』と改めて感じた。組合活動に疑問を感じたこともあったが、全国教研への参加で、組合活動の大切さが分かった。学んだことを後輩に伝えていけたらと思う」(地域における教育改革とPTA)といった声があった。

1月21日(土)、兵庫県教職員組合・兵庫教育文化研究所は、ラッセホールで阪神・淡路大震災の周年事業として、『震災シンポジウム「いきるつながる みちひろく」』を1・17と3・11を「つなぐ」と題した震災シンポジウムを開催し、290人が参加した。兵教組は、17年前におこった阪神・淡路大震災以来、様々な機会を通じて、創造的な教育復興と震災の教訓に学ぶ教育にとりくみできた。これらのとりくみには、①震災当時の支援活動、②震災遺児奨学金の創設、③被災した子どもの心のケアのための研修会の実施や教育復興担当教員の配置への要請、④国際シンポジウムの開催、⑤書籍等の発刊、⑥震災・学校支援チーム(EARTH)設立

への提言と活動への支援などがある。昨年、3月11日に発生した未曾有の東日本大震災災害発生当初より、被災地の教職員組合と連絡を取り合い、兵庫のこれまでの経験をもとに、子どもたちの心のケアや教育の創造的復興

にむけ、義援金の贈呈など様々な支援をおこなってきた。このシンポジウムは、1・17と3・11を「つなぐ」ことにより、みちをひろくうとするものであり、要旨を裏面・次号に掲載する。

第61次教育研究全国集会(以下、全国教研)が、富山県富山市において、1月28日、30日の3日間開催され、延べ1万人が参加した。リポーター31人(内1/3が青年層)、司会者4人をふくむ総勢94人が兵教組教研として参加した。豪雪の為、全体会の記念講演が中止になるなどの変更もあったが、分科会では、熱心な討論が繰り広げられた。

「中学校指導要領の中で、放射線の性質と利用が新たに加えられ、核エネルギーの有効性が強調されているが、脱原発社会を意識した理科教育のあり方が必要。福島原発の事故では、日本国民全員が被曝者である意識が必要だ」(理科)

参加者の感想には、「中学校指導要領の中で、放射線の性質と利用が新たに加えられ、核エネルギーの有効性が強調されているが、脱原発社会を意識した理科教育のあり方が必要。福島原発の事故では、日本国民全員が被曝者である意識が必要だ」(理科)

兵庫県立舞子高校の諏訪清二さんが「大災害と子どもたちの支援」と題した講演をおこなった。また、被災地の子どもや障害のある子ども、地元の震災にかかわる活動をしている子どもなど7人をパネリストにシンポジウムが開かれ、活発な意見交換がおこなわれた。

兵庫だからこその、息の長い支援活動について考える



発行所 神戸市中央区中山手通4丁目10-8
兵庫県教職員組合
発行人 山名 幸一
編集人 泉 雄一郎
電話 050(3538)2346
1部7円 年定価280円
(組合員の購読料は組合費の中に含む)

2012/2・15
No. 1807

2面
・震災シンポジウムより
私にとっての震災と防災教育

冬の味覚陽春フェア

“清盛”御膳

2012年1月21日(土)～ 予約制 11:00～14:00 ※2日前までご予約下さい。

◆雪見御所	…小鉢	紅白鮎 いくら
◆大輪田泊	…造り	鮎の山葵醤油漬け
◆一の谷	…焼き物	鱈の香草焼き
◆殿局	…変わり鉢	鯛のつみれ鍋
◆福原京	…御飯	穴子飯 香の物

¥1,500(税込)

冬の味覚フェスタ

2012年1月20日(金)～2月29日(水) 11:00～14:00 17:00～21:00

※最終20:00までに来店下さい。
※日・祝の営業時間は18:00までとなっております。
但し、ご予約の際は事前にお問い合わせ下さい。

洋食ミニコース

- ◆本日のアンティパスト3種盛り
- ◆オニオンスープ
- ◆メインディッシュ
- 魚料理・肉料理から一品お選び下さい
- 魚料理 目板カレイのポワレ チーズ焼き
- 又は
- 肉料理 牛ロースサイコロステーキ 生薑風味のソース
- ◆季節のサラダ
- ◆デザート
- ◆パン or ライス
- ◆コーヒー

冬の食材ミニ懐石

- ◆先付 数の子の松前和え
- ◆造り 鯛 鮎 あしらえ色々
- ◆炊き合わせ 燕飯頭 梅人參 海老茶煮
- ◆焼き物 銀毫 玉あられ 青味
- ◆揚げ物 鯛照り焼 千枚煎
- ◆御飯 進根銀炙真丈 塩 レモン
- ◆留枕 合わせ味噌仕立て
- ◆水菓子 オレンジ

各 ¥1,980(税込)

レストランパーティープラン

11:00～21:00の間 2時間制 8名様～100名様 (40名様以上で貸切ができます)

※日・祝の営業時間は18:00までとなっております。
但し、ご予約の際は事前にお問い合わせ下さい。

【料理】8品 + フリードリンク
ビール・ウイスキー・焼酎・紅白ワイン・ウーロン茶・ジュース

お一人様 ¥3,900(税込)

Lasse Hall

〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-10-8
TEL.078-291-1117(代表)
FAX.078-291-0333
http://www.lassehall.com
E-mail info@lassehall.com

●神戸市地下鉄御元町駅より徒歩5分 ●JR、阪神元町駅より徒歩8分 ●JR、阪急、阪神、地下鉄三宮駅より徒歩15分 ●高連花園駅より徒歩15分 ●山陽新幹線神戸駅より徒歩5分

ご予約・お問い合わせは レストランリビエラ(直通) / TEL 078-291-1311

東日本被災地の教職員とともに震災シンポジウム

私にとっての震災と防災(減災)教育

富永良喜さん(兵庫教育大学大学院教授)をコーディネーターに、角田政志さん(福島県教組)、佐藤浩さん(岩手県教組)、諏訪清二さん(EARTH・兵高教)、見澤光徳さん(EARTH・西宮支部)がパネリストとして参加。「私にとっての震災と防災教育」の発表の後、「これからの防災教育」、フロアからの質問・意見があった。要旨を一部掲載する。「これからの防災教育」、フロアからの質問・意見については、後日掲載予定。

福島県教職員組合
書記長 角田政志さん



登下校時の子どもの様子を写真で示し、ご自身も放射線の積算計を首から下げ、目に見えない放射能の中で暮らす不安を語る角田さん。

ような防災教育がなされていたのか改めて考えなければならぬ。

震災発生後

津波などの情報が入ってこなかった。防災無線もどこまで通じていたのか分からない。情報は、人から人への口伝えにしか

命を守る防災教育の検証
津波は高台に避難すると教えられていても、海岸沿いに高台はなく実際に避難した経験はない。津波を想定した避難訓練がおこなわれていない地域も多くあった。地域の中で、子どもたち、地域の人々の命を守る

原発事故後の避難

福島県ではその後、原発事故が起き、非常事態宣言が出された。避難勧告が出されたが、状況説明や避難経路も示されないままの「ただ逃げろ」の勧告だ。

原発事故の防災訓練は自治体でおこなっていたが、形式だけのものではなかった。「原発事故は起こらない」という原則で、避難する事態はないということが根本にあった。市町村がおこなっている防災訓練に学校も参加したが、その訓練は屋内訓練で、体育館に避難をする訓練のみだった。

原発事故に対する避難では、国が避難誘導のために設置しているSPED I(放射能の流れを表示する)データも全て隠された。情報

原発事故で奪われたもの

原発事故において、私たちは本当に無防備だ。これまで福島県教組として、原発反対運動をすすめてきたが、本当にこれほどの大事

故が起こればと思うていなかった。しかし、事故後の影響は非常に大きい。子どもたちの学習権、生活権、教育の機会均等、そういったものを奪われてしまった。

今後の福島県の教育

今、12,000人(9月現在文科省発表)の子どもたちが県外避難をしてい

る。そのため、学校現場では教員数が450人も過員となっている。この状況で、福島県にはどれだけの復興加配が配置されるのか。また、被災した教職員は、大変厳しい中で教育活動をすすめており、しかも先が見えない不安の中の生活が強いられている。

今後、子どもたちが戻ってこられるのかは分からない。教職員も、戻りたい人とは戻りたくない人がいる。福島県教委は来年度の新採用の試験をおこなわなかった。福島県の教育は、今後どうなってしまうのだろうか。将来を見据えた、教育の基準を早く示してほしい。

また、子どもたちの健康をどのように守るかという問題と同時に、子どもたちにどのように放射能教育をしていくかが大きな課題となっている。

放射能の問題

福島市を中心に高濃度の放射能地域が多くある。臨



EARTH員
県立舞子高校環境防災科
諏訪清二さん

誰でもできる防災教育

これまで防災教育に12年関わっていることは、防災教育をする担い手は災害体験を持たなければならぬということだ。この災害体験は3つあると思う。

1、直接被災体験
舞台上の3名の先生方のような被災体験は、防災教育をする上ですごい防災教育が出来ると思う。被災体験は防災教育をおこなう上で、一つのエネルギーに

なってくる。しかし、被災体験が重く、防災教育をしたくない、出来ないという方がおられるのも分かる。

2、直接支援
支援者という形で被災地に入り、被災者の方々の話をいっぱい聞く。考えさせられることがたくさんある。私自身が直接支援体験者であり、この直接支援体験者にもっと防災教育をしてほしい。しかし、この直接体験者もごく一部のみに限られる。

3、学ぶ姿勢を持った人
直接体験者や直接支援者から学ぶ姿勢を持った人は、防災教育ができる。簡単に言えば、誰でも防災教育はできる。なぜそう思うか。平和教育を考えた時、

皆が戦争の直接体験者でもなければ、直接支援者でもない。しかし、素晴らしい平和教育は生まれている。防災教育は、担い手が学べばできる。今日の会で岩手や福島の先生の話を持ち帰り、子どもたちに伝えることで防災教育はできると思っている。

防災教育の検証と深化

阪神・淡路大震災の後、新しい防災教育がうまれた。「備える防災教育」「兵庫の教育改革のとらえ方」だ。兵庫の教育改革とは、震災後、子どもたちの心のケアや学校再開、教育再開などについて。避難訓練の次に理科教育がある。この教育は震災で通用したか。また、その後に深化した避難訓練や理科教育があり、備え中心の防災教育が生まれ、今は防災教育+αが生まれている。この+αは、楽しさであって面白さであったり、子どもの得意とするもの。そして最後に、大震災から学ぶ教育という言葉が生まれた。この教育で、心のケア、命、助け合いなどを中心に、皆さんが非常に苦労してきたものがある。この教育が、東日本大震災で通用したのかを検証して行く必要がある。

最後に想定を信じない防災教育がある。これは2部で話したい。



岩手県教職員組合
中央執行委員・青年部長
佐藤浩さん

大津波は、私たちの生活全てを飲み込んでいった。この津波に対する備え(防災教育)は不十分だったのではない。10メートル以上の津波が来る確率として、2013年までが70%、2033年までが99%、2003年度に地震調査研究推進本部から発表されていたが、知らない人もいた。

私たちの想定の甘さ

「ぼうさい甲子園」で「ぼうさい大賞」を釜石小学校が受賞した。釜石市などのように、津波のメカニズムや特徴、避難方法などを授業の中で学習したり、学校が地域と一緒に下校時に避

震災発生後の問題

震災発生後、停電になった。校内放送や一部地域の防災無線が使えなくなる。校内への伝達はできても、外部とのやりとりは一切遮断される。下校途中、下校の子どもたちは、情報のない中、自ら判断して行動しなくてはならない状況になった。そして、地震発生から津

波到達までの約30分間の行動が明暗を分けることになる。交通の便が悪い沿岸部では、自動車が日常生活の必需品であり、身近だ。本来はまず高台へと逃げるべきだが、道具の利便さゆえに車で逃げた方が多い。また、位牌などの物やペットを家に残してきたために戻った方が犠牲になっていったが、高齢者や要介護の方など、高齢化社会が抱える課題があり、一概に判断できない。また、学校に子どもを迎えにきた保護者もあり、一部の学校では子ども



東日本大震災では、風化した防災意識、私たちの想定が整理されていない備えなどの課題が残っている。

避難所の問題

避難後の問題は、避難所についてだ。避難所のほとんどが学校だった。しかし、防寒対策や食料などの備えのない、名ばかりの避難所が多かった。また、衛生面



EARTH員
西宮市立山口小学校
見澤光徳さん

防災教育のポイント

防災教育には3つのポイントがあると、私の中でルールを決めている。

1、「決しておどさない防災教育」。子ども自身が、何かあった時にどうするかという姿勢を育てる防災教育。普段から、どんなことをしたらいいかを考える授業だ。

2、「命を考える防災教育」。防災教育は、人と人とのつながりがなければいかに考える学習だと思う。命

は大事。普段から、お互いの命をどう大事にするかということを考える授業を心がけている。授業の開始前には、必ず黙祷をしている。「黙祷」の意味も説明してやりたい。

3、「子どもたちに、わかりやすく、安心できる防災授業」。イラストや図、わかりやすい言葉、クイズなど。阪神・淡路大震災の揺れのビデオや東日本大震災のビデオを通して、活断層型地震やプレート間地震の違いを教えたり、津波に対しては具体的に目指す場所を合言葉にしたりしている。また、ペットボトルを使った液状化実験やコンピ

二の列に並ぶ人たちが働いている人の写真を使ったり、「人々の気持ち」を考えると、被災者の話やボランティアの話などにふれさせている。また、応急処置の圧迫止血法、胸



舞子高校で防災教育をはじめてから、様々な被災地に行く中で、教職員組合だけでなく、行政、NPO、ボランティア、大学の先生などいろいろな方とのネットワークが広がっていった。このネットワークを使って、防災教育、被災地支援をおこなっている。

ボランティアは、1回行くだけでなく大事だが、何らかの継続性が必要だ。この継続性とは、ボランティア

